宮城県内における超重症児の統計的概数（試算）

阿部幸泰

Ⅰ：宮城県内の超重症児の概数

①文献１）によれば、平成１３年度調査から、人口１０万人に３．５人。

②宮城県の人口を約 240 万人とすれば 84 人。

③重症児の有病率０．０２８９％から、宮城県内の重症児は、約６９４人。

④故に、宮城県内の重症児に占める超重症児の比率は、１２．１％。

Ⅱ：宮城県内重症児施設の超重症児の概数

①文献２）によれば、全国の国立療養所入所の超重症児は、入所重症児に占める比率は、７％。

②また、東北の国立療養所入所の超重症児は、入所重症児に占める比率は、４．８％。

③文献１）によれば、国立、公法人立重症児施設の超重症児は、入所重症児に占める比率は、６％。

④エコー療育園（以下「エコー」）１１０床、西多賀病院（以下「西多賀」）８０床、宮城病院（以下「宮城」）１２０床から、西多賀と宮城入所中の合計超重症児は、約１０～１４名。三施設の入所中の超重症児は、約１９名。

⑤文献３）から、宮城県内の平成１４年１月１日現在の三施設の入所中の超重症児の実数は１８名。統計的概数も、ほぼ実数を予想できるということになる。

⑥文献４）によれば、「新生時期にＮＩＣＵに入院した児のうち、１年以上の入院数は全入院数の約５％を占めており、この入院患児の殆どが超重症児」との全国調査から、宮城県内の重症児施設以外の病院（以下「一般病院」）には、年間３人～５人の超重症児が入院していると推計している。

⑦平成１３年３月１日現在の超重症児の入院実数は、宮城県内の主な三ヶ所の一般病院だけでも、計８人。このことから、宮城県内一般病院入院中の超重症児は、疾患時期が新生時期とは限らないことから考えて、実数はかなり多人数と推測される。

Ⅲ：在宅の超重症児の概数

①　ⅠとⅡから、宮城県内の重症児病棟に入所していない超重症児の概数は、約６５名。

②文献１）によれば、超重症児の２３．５％は一般病院に入院中とのデータから、宮城県内一般病院入院中の超重症児は、約２０名。

③宮城県内の超重症児の約半数の約４５名（５３．６％）が、在宅で過ごしていることになる。

④文献２）によれば、国立療養所入所中の超重症児の超重症児に占める年間死亡率は、８．９％である。宮城県内の国立療養所の西多賀、宮城だけでなく、公法人立のエコーを含めた三施設の超重症児の概数から試算すると、三施設で年間計約２名の超重症児が統計的には亡くなっていることとなる。

Ⅳ：今後の在宅の超重症児数の予想と対策

①上記の事情の入退院があっても、救急救命医療、周産期医療の益々の発達を考えると、在宅超重症児の数は増えこそすれ、少なくなることは、予測し難い。

②こうしたことから、県内重症児施設は常に満床に近いことからも、また、一般病院を退院し在宅で過ごす超重症児は今後増加傾向を示すものと考えられる。

③在宅の超重症児（医療行為、また、医療的ケアを濃厚に必要とする子ども）を念頭においた福祉（通園施設、支援費制度サービス、等々）施策、教育（養護学校、地域の学校への通学、等々）の充実及び施策の方略が、早急な課題と考える。

参考文献

１）諸岡美知子：岡山県における超重症児の実態調査、日本重症心身障害学会誌、28-3 、157-162 、2003.

２）馬場輝實子：国立療養所の重症心身障害児（者）における超重症児（者）の死亡調査、日本重症心身障害学会誌、28-3 、147-152 、2003.

３）「宮城県ＨＰ（http://www.pref.miyagi.jp/）→病院局→小児医療施設整備室→小児リハビリテーション医療システム→小児リハビリテーション医療の現状（表３－３　重症心身障害児施設の入所状況」サイト。

４）「宮城県ＨＰ（http://www.pref.miyagi.jp/）→病院局→小児医療施設整備室→小児リハビリテーション医療システム→周産期医療、小児救急医療及び発達障害の動向（表２－３ＮＩＣＵの入院状況」サイト。

（2003 年 12 月 10 日　記　）